



幼稚園教諭自身によるペアレント・トレーニングの
実践：どのような母親に効果が見られたのか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2013-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 裕子, 立元, 真, 古川, 望子, 齊田, 聖美, 椎葉, 恵美子, Fukushima, Hiroko, Furukawa, Misako, Saita, Kiyomi, Shiiba, Emiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4519

幼稚園教諭自身によるペアレント・トレーニングの実践

— どのような母親に効果が見られたのか —

福島裕子¹, 立元真², 古川望子³, 齊田聖美¹, 椎葉恵美子⁴

Parent Training by Kindergarten Teachers

— The difference in intervention in terms of mothers' parenting skills —

Hiroko FUKUSHIMA, Shin TATSUMOTO, Misako FURUKAWA,
Kiyomi SAITA, Emiko SHIIBA

ペアレント・トレーニングという子どもをもつ親を対象とした心理教育プログラムがある。ペアレント・トレーニングは、子どもに直接に介入するのではなく、子どもにとって最も身近で優秀な教師になりうる子どもの親に対して行う、子どもの望ましい行動を高めたり不適切な行動を防止したりする介入の方法である。このプログラムは、主に発達障害の子どもに対する個別臨床あるいはグループ形式の介入の方法として拡大されてきた。

ペアレント・トレーニングのプログラムの中で、我が国のプログラムの一つである、「はなまるプロジェクト」は、幼稚園や保育所で集団介入を行う。また、その内容を保育者自身が研修することによって、子どもの親と保育者が、同じ考え方や方針のもとで子どもにかかわることができる。保育者がこのプログラムの内容に関する研修を受けることが保育を介して子どもたちに及ぼす効果は、立元・児玉・井上・吉川(2006)や立元・古川・福島・永友(2011a)によって示されてきた。

幼児をもつ保護者向けの「はなまるプロジェクト」の介入では、保護者たちにペアレント・トレーニングを実施することによって、保護者が養育スキルを獲得し、家庭で子どもへのかかわり方が変容していき、子どもたちの愛着行動(立元, 2005)や社会的な行動傾向が改善し(立元・福島, 2009), さらに保護者自身の育児上のストレスや不安感が改善されることがこれまでに示されてきている(立元, 2009)。各々の幼稚園や保育所で、保護者にとって身近な存在である園内の保育者自身がトレーナーとなってペアレント・トレーニングを行うことができるようになると、上記のような理想的な循環が生じるようになり、これは、幼稚園教育要領に記されている「子育てのセンター」としての機能が充実することにつながる。

本研究では、「はなまるプロジェクト」で用いている幼児版ペアレント・トレーニングプログラム(はな・ちゅう・ほ; 立元, 2005)を著者自身が研修し、幼稚園の保護者を対象にペアレント・トレーニング介入を行い、「はなまるプロジェクト」の介入(立元, 2005)と同様の結果

¹ 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園・宮崎大学大学院教育学研究科

² 宮崎大学教育文化学部

³ 宮崎大学医学部

⁴ 宮崎市立住吉南小学校・宮崎大学大学院教育学研究科

がみられるか否かを検討し、プログラムの実行可能性の検証を試みる。この実行可能性が確認できることは、プログラムの普及に重要な要件となる。

これまでの「はなまるプロジェクト」の介入実践では、「望ましい働きかけ」や「話し合いと制限」、「関心」というポジティブな養育スキルが向上し、他方、ネガティブな養育スキルである「罰」や「一貫性のないしつけ」のスキルの使用があきらかに減少したことが示された（立元，2009）。

さらに立元(2009)は、介入前の参加者が持っていた養育スキルの状況の分類に基づいて介入効果の検討を行い、概して本介入は、『不適切な養育スキルを用いる群』の参加者たちに対して特に高い介入効果を示し、『コミュニケーション不全群』については、介入効果はあるが効果がやや遅れて生じ、『適切な養育スキルを用いる群』については天井効果に近い状況が見られることを示した(立元，2009)。

本研究は、幼児版ペアレント・トレーニングプログラム(はな・ちゅう・ぼ)を、研修を受けた附属幼稚園教諭が行い、それが高い精度で行われうることを、立元(2009)が行ったものと同等なポジティブな効果が得られるという実行可能性を検討することを目的として行った。

【方法】

調査対象

平成18年から23年までの間に、宮崎大学教育文化学部附属幼稚園の年中児の保護者の中から参加者を募って、集団形式のペアレント・トレーニングを行った。介入は、夏休みが終わり子どもたちが落ち着いた9月初旬から約1ヶ月間に渡って行った。

手続き

宮崎大学で実践してきた、幼児版のペアレント・トレーニングプログラム(はな・ちゅう・ぼ)を用いた。この際、パワーポイントプレゼンテーションと、ハンドアウト冊子は、立元(2005)が作成したものをを用いた。プログラムは1セッション約90分であり、約1週間の間隔をおいて5セッションを行った。

幼児版ペアレント・トレーニングプログラム(はな・ちゅう・ぼ) ペアレント・トレーニングは、養育者の養育スキルや子どもの行動傾向を改善することを目指している。このことによって養育する際のストレス症状の改善が期待され、養育ストレスやその他のストレスの結果として生じる、養育者自身の疾病や虐待行為の防止を目指していく。また、ペアレント・トレーニングは、発達障害児のみならず、特に障害を持たない幼児を持つ親への子育て支援的な活用においても効果が期待される(立元・坂田，2008)。

プログラムの内容は以下の通りである。

第1回：注目を与えること ①「注目を与えること、取り去ることの影響」、②「注目の与え方とそのポイント」、③「子どもの行動を3つ(はなまる行動、注目獲得行動、ぼーそー行動(注目が関係しない不適切な行動))に分類すること」を説明した。さらに、ホームワークとして、「行動分類表」のプリントを配付し、家庭での子育てを通して子どもの行動例を分類・記入するよう求めた。

第2回：ほめること(賞賛) 普段どのように子どもをほめているかについて発言を求め、ディスカッションを行った。続いて、①「賞賛の方法とポイント」、②「学習の原理(レスポонден

ト条件づけ、オペラント条件づけ、観察学習)」、③「予告、プレマックの原理」、④「シェイピングの原理とプロンプティング」、⑤「トークンシステム」の内容を教示した。さらに、スモールステップの原理と背向型の原理についてのプリント課題を配付した

第3回：シランプリ（計画的無視）をすること 注目獲得行動の具体例（子どもが注目獲得行動としてスーパーで泣き騒ぐ）を提示し、ディスカッションを行った。おもな教示内容は①「計画的無視」、②「非隔離型のタイムアウト」であり、ロールプレイを交えて学習した。

第4回：上手な制限を設けること（制限） おもな教示内容は、①「望ましい行動が生じやすいようにすることによって“ほーそー行動”を防止すること」、②「養育の方向性を明確にすること（家族のルール）」、③「制限のテクニック（指示、警告、タイムアウト）」であり、ロールプレイを交えてスキル学習を行った。

第5回：子どもの発達と心の問題 このセッションでは、子どもの発達の状況や心の問題をディスカッションし、これまでの教示内容の実際の子育てへの般化を促した。また、子育て上の問題に対処するための問題解決的思考およびその実践例について説明した（立元ら、2010）。

ペアレント・トレーニングのトレーナーとしての研修

平成17年度にプログラムの開発者が附属幼稚園の保護者に対して幼児版のペアレント・トレーニングを実施した（立元、2005）。第一著者は、トレーニングの様子を観察すると同時にビデオ撮影を行い、トレーニング終了後、ビデオ再生を行いながらペアレント・トレーニングのビデオ記録をテキストに起こす作業を行い、内容の詳細な学習を行った。

次いで、附属幼稚園の職員研修としてトレーナー演習を行った。研修の内容は、幼児版のペアレント・トレーニングプログラムを用い、パワーポイントプレゼンテーションとハンドアウト冊子を使いながら、1回分のトレーニング内容を職員2人で分担して伝達するものであった。約1週間の間隔をおいて、計5セッションの研修を行った。その際、開発者も研修の場で質問に答え、ポイント教示の際の助言を行った。研修した内容は、各保育者がその後の保育の中で用い生かすように心がけた。

査定のための尺度

本研究で行うペアレント・トレーニング介入が、おおもとの「はな・ちゅう・ほ」のプログラムに忠実に実践されることができたか否かを査定するために、「はな・ちゅう・ほ」の開発者が作成したチェックリストを用いた。このリストは、第1回介入23項目、第2回介入17項目、第3回介入18項目、第4回介入22項目、第5回介入25項目の、計105項目からなる。

プログラムを実践したことの、参加者や子どもたちへの効果査定については、母親の養育行動の変容を調べるために、幼児版養育スキル尺度Ver.2（立元、2005）を用いて母親の養育スキルの変容を、子どもの社会的行動評価尺度（CSB-RS）（立元・古川・福島・永友、2011b）を用いて子どもの社会的行動の変動を、心理的ストレス反応尺度（新名・坂田・矢富・本間、1990）を用いて母親のストレス反応の変化を、それぞれ母親評定によって測定した。これらは、介入開始30日前・プログラム開始直前・プログラム終了直後・プログラム終了30日後に査定を行った。各尺度の得点は、100を中央値とし、標準偏差を15とした偏差値で示され、プログラム実践者は、各時点での参加者や子どもたちの行動傾向の推移を確認することができた。

養育スキル尺度 母親の具体的な養育行動を調べるために、立元（2005）の、幼児期の子どもを持つ母親用の養育スキル尺度Ver.2を用いた。この養育スキル尺度は、ポジティブな養育スキルとしての「好ましい働きかけ」スキル（15項目）、「話し合い」スキル（7項目）、「関心」スキル

(4項目)、さらにネガティブな養育スキルとしての「罰」スキル(12項目)と「一貫性のないしつけ」スキル(6項目)からなる

子どもの社会的行動尺度 (CSB-RS) 子どもの行動傾向を測定するために子どもの社会的行動尺度 (CSB-RS) を用いた。この尺度は、31項目を7段階で評定し、ポジティブな行動傾向としての「協調的な適応行動」の因子 (7項目)、「自己統制的行動」の因子 (2項目)、および、ネガティブな行動傾向としての「衝動的・多動的行動」の因子 (9項目)、「攻撃的行動」の因子 (6項目)、「孤立行動」の因子 (5項目)の5つの観点から測定する (立元ら, 2011b)。

心理的ストレス反応尺度 母親の心理的ストレス反応を調べるために、新名ら (1990) によって作成された53項目からなる心理的ストレス反応尺度を用いた。この尺度は、情動的ストレス反応を測定する4下位尺度計26項目「抑うつ」(8項目)、「不安」(8項目)、「不機嫌」(5項目)、「怒り」(5項目)、および認知・行動的ストレス反応を測定する9下位尺度計27項目「自信喪失」, 「不信」, 「絶望」, 「心配」, 「思考力低下」, 「非現実的願望」, 「無気力」, 「引きこもり」, 「焦燥」(それぞれ3項目)によって構成されている。

【結 果】

プログラムの実践の忠実性の検討

平成23年度の実践について、プログラムの開発者が作成したチェックリストを用いて、プログラム実践の忠実性を検討した。チェックリストの項目は、全105項目中95項目が達成され、達成率は90.4パーセントであった。完全に達成されなかった項目は以下の通りであった。

第5セッションの2項目「ストレスの考え方」と「ストレスに対処する方法」についてはその場で説明をせず、参加者に資料を読んでおくように伝えただけだった。また、考えたことを資料に書き込む場面が5回あったうち、2回は実際に書き込ませたが、3回はその場で考えるように促したのみであった。その他、全5セッションの介入において参加記録のシールを貼らせずに終了していた。

介入効果の検討

本研究において介入開始30日前、介入開始直前、介入終了直後、介入終了30日後の4時点において測定した。母親の養育スキル、ストレス反応、子どもの行動傾向についての3種類の尺度の得点について、以下のような統計的検定を行った。まず、各尺度、各因子の得点について測定時期の要因についての1要因分散分析を行い、主効果が有意であれば、Bonferroniの法による多重比較を行った。この平均値の差の検定において、①介入開始30日前から介入開始直前の得点の変化が有意でないこと、②介入開始直前から介入終了直後、または介入終了30日後にかけての得点の差が改善方向⁵で有意であること、さらに、③算出した効果サイズ(Cohenのd)が、改善方向において十分な大きさ(|d|>.02)であることを、介入効果を認める要件とした。

介入開始時 (pre 0) とWL期の比較、介入開始時から介入終了時 (post) 及び介入終了30日後 (follow) の間の介入効果、介入開始時 (pre) から終了直後 (post) 及び介入終了30日後の効果サイ

⁵ 改善方向・悪化方向 母親用の養育スキル尺度は、ポジティブな養育スキル3因子とネガティブな養育スキル2因子からなる。また、CSB-RSは、ポジティブな行動傾向としての2因子、および、ネガティブな行動傾向としての3因子からなる。さらに、心理的ストレス反応は、すべてがネガティブな評価項目である。本論文では、ポジティブな評価項目の得点が向上すること、あるいは、ネガティブな評価項目の得点が低下する変化を、改善方向の変化とし、その逆を悪化方向の変化とした。

Table 1 被介入者全体への介入効果

	下位因子	介入群					統制群				
		WL 期	pre0- post	pre0- follow	d(pre0- post)	d(pre0- follow)	WL 期	pre0- post	pre0- follow	d(pre0- post)	d(pre0- follow)
養育スキル	好ましい働きかけ	n.s.	n.s.	n.s.	0.03	0.04	n.s.	n.s.	n.s.	-0.01	-0.00
	話し合い	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.16	n.s.	n.s.	n.s.	0.06	0.10
	関心	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.13	n.s.	n.s.	n.s.	0.10	0.17
	罰	p<.05	n.s.	p<.05	-0.13	-0.19	p<.05	n.s.	n.s.	-0.05	-0.07
	一貫性のないしつけ	n.s.	n.s.	p<.05	-0.19	-0.19	p<.05	n.s.	n.s.	0.00	-0.02
CSB-RS	衝動・多動性	n.s.	n.s.	p<.05	-0.06	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.11	-0.10
	攻撃的行動	p<.05	p<.05	p<.01	-0.15	-0.21	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.13
	協調的な適応行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.08	0.13	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.07
	自己統制行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.09	0.09	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	0.17
	孤立行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.20	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.14
ストレス	抑うつ	n.s.	p<.05	n.s.	-0.22	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.10
	不安	n.s.	n.s.	n.s.	-0.19	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.02	-0.06
	不機嫌	n.s.	n.s.	n.s.	-0.18	-0.18	p<.05	n.s.	n.s.	-0.02	-0.11
	思考力低下	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.10	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	-0.02
	絶望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	-0.01
	不信	n.s.	n.s.	p<.01	-0.17	-0.23	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.00
	自信喪失	n.s.	p<.05	p<.05	-0.21	-0.19	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.07
	怒り	n.s.	n.s.	n.s.	-0.16	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.10
	無気力	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.06
	引きこもり	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.12	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.05
	非現実的願望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.12
	焦燥	n.s.	n.s.	n.s.	-0.10	-0.16	n.s.	n.s.	n.s.	-0.02	-0.08
	心配	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.16	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	0.01

効果サイズ凡例 **大** **中** **小**

ズによって示される結果をTable 1に示す。

養育スキルへの効果 「一貫性のないしつけ」のスキルの使用において、平均値の差の検定では介入開始からフォローアップ時点の長期間にかけて有意な改善が見られた ($p<.05$)。効果サイズでは、有意な改善は見られなかった。「罰」スキルの使用において、平均値の差の検定では介入開始からフォローアップ時点の長期間にかけて有意な改善が見られた ($p<.05$) が、介入前からのWL期の期間においても改善が見られている結果になっていた。これは、介入前の30日間が夏休みであり、介入開始直前に夏休みが終了し、そのことが母親の「罰」スキルの使用を変化させたものではないかと考えられる。

子どもの行動傾向(母親の評定によるCSB-RS)への効果 子どもの「衝動的・多動的行動」においては、平均値の差の検定では、介入開始からフォローアップ時点にかけての長期的な改善が有意であった ($p<.05$)。効果サイズでは、有意な改善は見られなかった。「攻撃的行動」においては、平均値の差の検定では、介入開始から介入終了時 ($p<.05$)、フォローアップ時点にかけての長期的な改善 ($p<.01$) が有意であったが、介入前のWL期にも改善が見られている。このWL期の変化についても養育スキルの「罰」の使用と同じ夏休み効果が考えられる。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の改善が見られた。

母親のストレス症状への効果 「抑うつ」の因子において、平均値の差の検定で介入開始から終了時にかけて有意な改善が示された ($p < .05$) が、長期的に見ると改善効果があるとは言えない。効果サイズでは、有意な改善は見られなかった。「不信」の因子において、平均値の差の検定では介入開始からフォローアップ時点の長期間にかけて有意な改善が見られた ($p < .01$)。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。「自信喪失」の因子において、平均値の差の検定では介入開始からフォローアップ時点の長期間にかけて有意な改善が見られた ($p < .05$)。効果サイズでは、介入開始時から介入終了直後にかけて小程度の効果が見られた。

母親の養育スキルによるサブグループごとの介入効果の検討

ペアレント・トレーニングに参加した保護者の養育スキルがどのように変化したかということを検討した結果、全体の結果としてはあまり改善が見られない結果であった。そこで、被介入者の養育スキル特性によるグループ分けをしてさらに効果を検討した。

ベースライン期である教室30日前 (Pre30) と教室直前 (Pre) における、5領域の養育スキルのZ得点をクラスター分析にかけ、3つの群に分けた。「好ましい働きかけ」、「話し合い」、「関心」の得点が高く、「罰」、「一貫性のないしつけ」の得点が低い群を、『適切な養育スキルを用いる群』とし、「好ましい働きかけ」、「話し合い」、「関心」の得点が低く、「罰」、「一貫性のないしつけ」の得点が高い群を、『不適切な養育スキルを用いる群』とした。さらに、「好ましい働きかけ」、「罰」、「関心」の得点は平均的であるが、「話し合い」、「一貫性のないしつけ」の得点が低い群を、『コミュニケーション不全群』とした。3つの群を、介入を行った介入群と行わなかった統制群に分け、計6群とした。その結果、適切な養育スキルを用いる実験群66名、コミュニケーション不全実験群42名、不適切な養育スキルを用いる実験群28名、適切な養育スキルを用いるWL群64名、コミュニケーション不全WL群39名、不適切な養育スキルを用いるWL群28名、となった。

適切な養育スキルを用いる群

介入開始時 (pre0) とWL期の比較、介入開始時から介入終了時 (post) 及び介入終了30日後 (follow) の間の介入効果、介入開始時 (pre) から終了直後 (post) 及び介入終了30日後 (follow) の効果サイズによって示される結果をTable 2に示す。

養育スキルへの効果 『適切な養育スキル群』では、平均値の差の検定では、各養育スキルの使用において有意な改善は見られなかった。『適切な養育スキル群』の参加者は、もともと持っている養育スキルが高いために天井効果が生じたものと思われる。

効果サイズでは、「話し合い」のスキルの使用において、介入開始時から介入終了直後にかけて小程度の効果が見られた。「関心」のスキル使用においても、介入開始時から介入終了直後にかけて小程度の効果が見られた。介入開始時からフォローアップ時点にかけては、介入効果が維持されていない結果が示された。「一貫性のないしつけ」においては、介入開始時から介入終了直後、介入開始時からフォローアップ時点において小程度の効果が見られた。

子どもの行動傾向(母親の評定によるCSB - RS)への効果 『適切な養育スキルを用いる群』では、子どもの行動傾向の平均値の差の検定において有意な改善効果は見られなかった。効果サイズでは、子どもの「孤立行動」において、介入開始時からフォローアップ時点において小程度の改善効果が見られた。

Table 2 適切な養育群に対する介入効果

	下位因子	介入群					統制群				
		WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)	WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)
養育スキル	好ましい働きかけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.05	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.18
	話し合い	n.s.	n.s.	n.s.	-0.21	-0.02	n.s.	n.s.	n.s.	-0.02	-0.01
	関心	n.s.	n.s.	n.s.	-0.23	0.02	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.00
	罰	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.16	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.18
	一貫性のないしつけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.24	-0.24	n.s.	n.s.	n.s.	0.01	-0.16
CSBR	衝動・多動性	n.s.	n.s.	n.s.	-0.01	-0.10	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.12
	攻撃的行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.19	n.s.	n.s.	n.s.	-0.11	-0.18
	協調的な適応行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.01	0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	-0.08
	自己統制行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	0.07	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	0.12
	孤立行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.31	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.10
ストレス	抑うつ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.03	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.13
	不安	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	0.01	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.08
	不機嫌	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.09	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.15
	思考力低下	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.09	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.14
	絶望	n.s.	n.s.	n.s.	0.00	-0.03	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.08
	不信	n.s.	n.s.	n.s.	-0.16	-0.19	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	-0.14
	自信喪失	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.11	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.14
	怒り	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.02	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	-0.11
	無気力	n.s.	n.s.	n.s.	0.03	-0.01	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.15
	引きこもり	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.14	n.s.	n.s.	n.s.	-0.16	-0.12
	非現実的願望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.17
	焦燥	n.s.	n.s.	n.s.	0.06	-0.05	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.15
	心配	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	0.00

効果サイズ凡例 **大** **中** **小**

母親のストレス症状への効果 『適切な養育スキル群』では、子どもの行動傾向の平均値の差の検定においても効果サイズでも、有意な改善は確認できなかった。『適切な養育スキル群』の母親は、本来、子育てに対してあまりストレスを感じていない群であるので、天井効果が生じたものと考えられる。

コミュニケーション不全群

介入開始時 (pre0) とWL期の比較, 介入開始時から介入終了時 (post) 及び介入終了30日後 (follow) の間の介入効果, 介入開始時 (pre0) から終了直後 (post) 及び介入終了30日後 (follow) の効果サイズによって示される結果をTable 3に示す。

Table 3 コミュニケーション不全群に対する介入効果

	下位因子	介入群					統制群				
		WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)	WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)
養育スキル	好ましい働きかけ	n.s.	n.s.	n.s.	0.29	0.24	n.s.	n.s.	n.s.	0.11	0.11
	話し合い	n.s.	n.s.	n.s.	0.27	0.41	n.s.	n.s.	n.s.	0.09	0.10
	関心	n.s.	n.s.	p<.05	0.45	0.50	n.s.	n.s.	p<.05	0.42	0.51
	罰	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.16	n.s.	n.s.	n.s.	0.06	0.08
	一貫性のないしつけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	0.24
C S R B S	衝動・多動性	n.s.	n.s.	p<.05	-0.17	-0.31	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.14
	攻撃的行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.03	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.05
	協調的な適応行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.16	0.11	n.s.	n.s.	n.s.	-0.23	-0.17
	自己統制行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.27	0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.19	0.20
	孤立行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.21	-0.26	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.19
ストレス	抑うつ	n.s.	p<.05	n.s.	-0.40	-0.27	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.16
	不安	n.s.	n.s.	n.s.	-0.37	-0.28	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.10
	不機嫌	n.s.	n.s.	n.s.	-0.28	-0.27	n.s.	n.s.	n.s.	-0.01	-0.19
	思考力低下	n.s.	n.s.	n.s.	-0.33	-0.11	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	-0.01
	絶望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.31	-0.21	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	0.00
	不信	n.s.	n.s.	n.s.	-0.31	-0.32	n.s.	n.s.	n.s.	0.10	0.10
	自信喪失	n.s.	n.s.	n.s.	-0.33	-0.38	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.10
	怒り	n.s.	n.s.	n.s.	-0.31	-0.22	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.19
	無気力	n.s.	n.s.	n.s.	-0.36	-0.24	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.09
	引きこもり	n.s.	p<.05	n.s.	-0.40	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.03
	非現実的願望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.26	-0.12	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.14
	焦燥	n.s.	n.s.	n.s.	-0.35	-0.29	n.s.	n.s.	n.s.	0.04	-0.11
	心配	n.s.	n.s.	n.s.	0.20	0.22	n.s.	n.s.	n.s.	0.13	0.04

効果サイズ凡例 **大** **中** **小**

養育スキルへの効果 『コミュニケーション不全群』では, 介入群の「関心」のスキルにおいて, 平均値の差の検定において介入開始からフォローアップ時点の長期間にかけて ($p<.05$) 有意な改善が見られた。効果サイズでは, 介入開始時から介入終了直後, 介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。

「好ましい働きかけ」と「話し合い」のスキルの使用においては, 平均値の差の検定では, 有意な改善は認められなかった。効果サイズでは, 介入開始時から介入終了直後, 介入開始時からフォローアップ時点においてそれぞれ小程度の効果が見られた。

他方, 統制群では, 平均値の差の検定において「関心」のスキルの使用において有意な改善が示された。効果サイズにおいても, 介入開始時から介入終了直後では小程度, 介入開始時からフォローアップ時点においては中程度の効果が見られた。これは, 統制群も同じ幼稚園の保

護者であったために介入内容が漏れ伝わったことによる間接的な影響を受けた可能性が高いと考えられる。

子どもの行動傾向(母親の評定によるCSB-RS)への効果 『コミュニケーション不全群』では、子どもの「衝動的・多動的行動」においては、平均値の差の検定では、介入開始からフォローアップ時点にかけての長期的な改善が有意であった ($p<.05$)。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。子どもの「自己統制行動」においては、平均値の差の検定では有意ではないが、効果サイズでは、介入開始時から介入終了直後において小程度の効果が見られた。子どもの「孤立行動」においては、平均値の差の検定では有意ではないが、介入開始時から介入終了直後、介入開始時からフォローアップ時点において小程度の効果が見られた。

他方、統制群において、子どもの「協調的な適応行動」において、介入開始時から介入終了直後にかけて小程度の効果が見られた。このことも、統制群が同じ幼稚園の保護者であるために介入内容が漏れ伝わったことによる間接的な影響を受けた可能性が高いと考えられる。

母親のストレス症状への効果 『コミュニケーション不全群』では、「抑うつ」と「引きこもり」の因子において、平均値の差の検定で介入開始から終了時にかけて有意な改善が示された ($p<.05$)。しかし、フォローアップ時にはその効果は見られず、長期的に見ると改善効果があるとは言えない。効果サイズでは、「抑うつ」の因子では、介入開始時から介入終了直後、介入開始時からフォローアップ時点において小程度の効果が見られた。「引きこもり」の因子では、介入開始時から介入終了直後においてのみ小程度の効果が見られた。「思考力低下」や「非現実的願望」の因子においては、平均値の差の検定では有意な改善はみられなかったが、効果サイズでは、介入開始時から介入終了直後においてのみ小程度の効果が見られた。

「不安」や「不機嫌」、「絶望」、「不信」、「自信喪失」、「怒り」、「無気力」、「焦燥」、「心配」の因子についても、効果サイズにおいて、介入開始時から介入終了直後、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。

不適切な養育スキルを用いる群

介入開始時とWL期の比較、介入開始時 (pre0) から介入終了時 (post) 及び介入終了30日後 (follow) の間の介入効果、介入開始時 (pre0) から終了直後 (post) 及び介入終了30日後 (follow) の効果サイズによって示される結果をTable 4に示す。

母親の養育スキルへの効果 『不適切な養育スキルを用いる群』では、平均値の検定では、「罰」スキルの使用においてトレーニング開始時から終了時 ($p<.05$) にかけて有意な改善が見られたが、フォローアップ時点までは維持されなかった。「罰」スキルを使用しない方がよいということトレーニングの中では学んだが、それが維持できなかったと考えられる。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。また、「話し合い」のスキルの使用においては、平均値の検定では有意ではないが、効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。「一貫性のないしつけ」のスキルの使用においても、平均値の検定では有意ではなかったが、効果サイズでは、介入開始時から介入終了直後、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。

子どもの行動傾向(母親の評定によるCSB - RS)への効果 『不適切な養育スキルを用いる群』では, 子どもの「攻撃的行動」についての平均値の差の検定では, 介入開始からフォローアップ時点にかけて有意に減少した ($p<.01$)。効果サイズでも, 介入開始時から介入終了直後, 介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。子どもの「孤立行動」においては, 介入開始時から介入終了直後, 介入開始時からフォローアップ時点にかけて増えている結果が出ているが, この理由は现阶段では解釈不能である。

Table 4 不適切な養育群に対する介入効果

	下位因子	介入群					統制群				
		WL 期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)	WL 期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)
養育スキル	好ましい働きかけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.01	-0.05	n.s.	n.s.	n.s.	-0.03	0.12
	話し合い	n.s.	n.s.	n.s.	0.20	0.43	n.s.	n.s.	n.s.	0.32	0.50
	関心	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.07	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	0.24
	罰	n.s.	p<.05	n.s.	-0.36	-0.40	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.05
	一貫性のないしつけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.34	-0.38	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.07
C S B R S	衝動・多動性	n.s.	n.s.	n.s.	0.00	-0.08	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.02
	攻撃的行動	n.s.	n.s.	p<.01	-0.29	-0.32	n.s.	p<.05	n.s.	-0.31	-0.18
	協調的な適応行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.20	0.16	n.s.	n.s.	n.s.	0.07	0.14
	自己統制行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.19	0.01	n.s.	n.s.	n.s.	0.14	0.24
	孤立行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.28	0.20	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.14
ストレス	抑うつ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.18	-0.23	n.s.	n.s.	n.s.	-0.10	0.07
	不安	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.27	n.s.	n.s.	n.s.	0.07	0.07
	不機嫌	n.s.	n.s.	n.s.	-0.10	-0.24	n.s.	n.s.	n.s.	0.04	0.07
	思考力低下	n.s.	n.s.	n.s.	0.31	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	0.15	0.18
	絶望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.18	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	0.10
	不信	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.21	n.s.	n.s.	n.s.	0.07	0.17
	自信喪失	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	0.18
	怒り	n.s.	n.s.	n.s.	-0.19	-0.29	n.s.	n.s.	n.s.	0.08	0.06
	無気力	n.s.	n.s.	n.s.	-0.16	-0.39	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	0.13
	引きこもり	n.s.	n.s.	n.s.	0.00	-0.08	n.s.	n.s.	n.s.	0.00	0.09
	非現実的願望	n.s.	n.s.	n.s.	0.10	-0.05	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	0.05
	焦燥	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.18	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	0.02
	心配	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.02	0.12

効果サイズ凡例

大 中 小

また, 統制群においても子どもの「攻撃的行動」が介入開始から終了時にかけて減少していた ($p<.05$)。これは介入内容が漏れ伝わったことによる間接的な影響を受けた可能性が高い。効果サイズで見ると, 「攻撃的行動」が介入開始時から介入終了直後にかけて小程度の改善効果が見られたり, 「自己統制行動」で介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の改善効果が見られた。このような状況も上記のような影響があったと考えられる。

母親のストレス症状への効果 『不適切な養育スキルを用いる群』では, 平均値の差の検定では, 有意な改善は見られなかった。効果サイズにおいては, 「思考力低下」の因子において, 介入開始時から介入終了直後にかけて小程度の効果が見られた。また, 「抑うつ」や「不安」, 「不

機嫌]、「不信」、「怒り」、「無気力」の因子において、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。

【考察】

プログラムの実践の忠実性について

平成23年度の実践について、プログラム実践の忠実性を検討した。今回の90.4%は、同じように実践の忠実性を検討した先行研究（Johnson, Haden, Butter, Wagner, Mulick, Sukhodolsky, Williams, Swiezy, Arnold, Aman, Scahill, Stigler, McDougale, Vitiello, and Smith, 2007)の達成率の80%と比較しても高い値であり、概して高い精度で実践された。

本研究では、介入効果を認める要件を、①平均値の差の検定において、介入開始30日前から介入開始直前の得点の変化が有意でないこと、②介入開始直前から介入終了直後、または介入開始30日後にかけての得点の差が改善方向で有意であること、さらに、③算出した効果サイズ(Cohenのd)が、改善方向において十分な大きさ(|d|>.02)であることとした。

立元(2009)が行ったペアレント・トレーニングでは、介入を行った3群(適切な養育スキル群・不適切な養育スキル群・コミュニケーション不全群)とも、養育スキルの平均値の検定において、『コミュニケーション不全群』における「関心」を除いた全ての因子において、介入の効果および介入効果の維持が示されていた。効果サイズによる効果判定の基準を併せてみると、『適切な養育スキル群』における「話し合い」のスキルを除いてすべての群のすべての養育スキルの下位因子において介入効果が認められた。

しかし、同じ基準で判定した本研究における介入の効果は、『不適切な養育スキルを用いる群』の「罰スキル」、『コミュニケーション不全群』の「関心スキル」においてのみ効果が認められた。

立元(2009)と本研究の介入効果の結果では大きな違いが見られたが、本研究において保護者に改善して欲しいスキルには介入による改善が見られた。

前述のように、本介入では、高い水準でプログラムの忠実性を達成することができた。しかし、介入効果を検討したところ、その効果は期待した水準には達しなかった。その理由として、プログラムに対して忠実に達成できなかった部分が影響したことが挙げられる。

本介入では、参加者に毎回参加したご褒美としてのシールを貼るという部分が達成されていなかった。このことは、プログラムの中で扱ったトークンエコノミーシステムへの実感を味わうことの欠如につながり、参加や学ぶ意欲の低下の原因につながったと考えられる。

また、トレーニングの際に「やってみたこと」という宿題に対して、できた人は提出してくださいという促す程度だった。開発者の介入では、宿題が提出されるとトレーニングの最初の前回のふり返りの時に、宿題のいくつかを読み上げて宿題の提出がよいことであるという雰囲気作りを行い、他の参加者の実践例を示すことによって促進を図っていた。本介入ではその部分を忠実に再現していなかった。一回一回の内容を実践する雰囲気を作ることが、学んだことを実践しようという意欲付けにつながるとされる。「やってみたこと」の提出を促す必要性を感じた。

さらに、統制群にも改善効果が生じた理由を推測すると、本園は、保護者が園児の送り迎えをしている。そして、統制群も同じクラスの保護者であるため、トレーニングの内容について

保護者同士で情報交換が行われた可能性が高いと考えられる。しかも、ペアレント・トレーニングの内容を他言しないようにとは伝えていなかったために、統制群が実験計画上意味をなさなくなってしまうのではないかと考えられる。しかし、全保護者に直接の介入をしなくても、ある程度の間接的な効果がのぞめることを示す結果として捉えることもできる。立元(2009)の介入においても本研究と同じような結果が見られた。ペアレント・トレーニングの介入効果を測る際に、同じ幼稚園の保護者から統制群のデータを得ようとする場合に生じがちな結果と言えるだろう。そこで、統制群のデータを他の園の保護者から得る方法も今後検討する必要があると考えられる。

文 献

- Johnson, C. R., Haden, B. L., Butter, E., Wagner, A., Mulick, J., Sukhodolsky, D. G., Williams, S., Swiezy, N. A., Arnold, L. E., Aman, M. G., Scahill, L., Stigler, K. A., McDougle, C. J., Vitiello, B., & Smith, T. (2007) Development of A Parent Training program for Children with Pervasive Developmental Disorders. *Behavioral Interventions*, 22, 201-221.
- 新名理恵・坂田成輝・矢富直美・本間昭 (1990) 心理的ストレス反応尺度の開発 心身医学, 30, 30-38.
- 立元真 (2005) 幼児の親に対する予防的な養育スキル・愛着関係改善トレーニング 平成15～16年度科学研究費補助金(基盤C)研究成果報告書
- 立元真 (2009) 幼児を持つ親への予防的親トレーニングの試み(4) 一介入前の養育スキル特性による検討— 第73回日本心理学会発表論文集, 1106.
- 立元真・福島裕子 (2009) 幼児を持つ親への予防的親トレーニングの試み(5)一ペアトレはどんな子にどのように効いたのか— 第35回日本行動療法学会 プログラム&抄録・発表論文集, 310-311.
- 立元真・古川望子・福島裕子・永友絵理 (2011a) 保育者の養育スキル研修が幼児の行動に及ぼした効果 宮崎大学教育文化学部紀, 24, 教育科学, 1-10.
- 立元真・古川望子・福島裕子・永友絵理 (2011b) 保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の作成 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要, 19, 39-47.
- 立元真・児玉育子・井上妙子・吉川瑞枝 (2006) 幼稚園教諭への養育スキル研修が幼児の行動に及ぼした効果, 臨床発達心理実践研究誌, 1, 52-56.
- 立元真・坂田和子 (2008) 幼児をもつ母親の養育スキルとストレス反応. 乳幼児医学・心理学研究, 17, 83-91.